

去イヌレ 文永十一年二月に佐土の国より召し返されて、同じき四月の八日に平金吾対面して有し時、理不尽の御勘氣の由委細に申含ぬ。又恨らくは此国すでこのくにに他国に破られん事のあさましきよと歎申せしかば、金吾が云、何の比か大蒙古は寄せ候べきと問しかば、経文には分明ふんみょうに年月を指たる事はなけれども、天の御氣色を拝見し奉ルに、以の外に此国を睨にらませ給か。今年こんねんは一定寄ぬと覚おぼふ。若寄するならば、一人も面おもてを向者あるべからず。此又天の責め也。日蓮をばわどのばら（和殿原）が用ぬ者なれば力及ばず。穴賢あなかしこあなかしこ々々、真言師等に調伏ちようぶく行ちこなハせ給べからず。若行もしちこなハするほどならば、いよいよ悪あしかるべき由申付て、さて帰リてありしに、上下共に先の如く用ヒざりげルウヘに有上もと、本より存知せり、国恩を報ぜんがために三度みたびまでは諫曉かんぎようすべし。用ヒずば山林に身を隠さんとおもひし也。又上古じようこの本文ほんもんにも、三度のいさめ用ヒずば去レといふ。本文ほんもんにまかせて且しばラく山中まかりに罷入ぬ。其上は国主の用給ヒはざらんそのいかに其已下なに法門申て何かせん。申シたりとも国もたすかるまじ。人も又仏になるべしともおぼへず。

（建治三年六月）